

2 本邦の集中治療室に於ける ARDS の治療法と予後に関する実態調査

日本呼吸療法医学会・急性呼吸不全実態調査委員会委員、委員長*、研究協力者**

多治見 公高、今泉 均**、松川 周、磨田 裕、武澤 純、妙中 信之、岡元 和文**、
氏家 良人、天羽 敬祐*

本邦に於ては ARDS の予後に関する報告は少ない。本学会・急性呼吸不全実態調査委員会は、急性呼吸不全の実態を把握することを目的とし、昨年の本学会総会で設置が承認され活動を開始した。活動の第一歩として、9施設に於ける人工呼吸管理症例のデータベースを retrospective に作成した。今回はデータベースから ARDS 症例を検索し、治療法と予後に関して検討した。

1995年1月1日から1995年6月30日の期間に、札幌医科大学、東北大学、東京医科歯科大学、帝京大学、横浜市立大学、名古屋大学、大阪大学、熊本大学、宮崎医科大学の集中治療室に於て人工呼吸管理を施行された、年齢が1歳以上の963例のデータベースから American-European Consensus Conference により提唱された ARDS の定義を満たし、かつ年齢が16歳以上の72例を抽出し対象とした。予後評価には APACHE II system を用いた。

病院死亡率は69.4% (50/72) であった。これに対し APACHE II system による、第一日目の予測死亡率は50.6% であった。入室経路では、一般病棟から35例、救急外来から9例、他院から転送9例、手術室から19例で、各々の死亡率は74.1% (26/35)、77.8% (7/9)、66.7% (6/9)、57.9% (11/19) であった。補助的治療として NO 吸入2例、ECMO 3例、ECLA 2例が施行されていたが、その死亡率は100% であった。また、呼吸不全の薬剤治療として蛋白分解酵素阻害剤14例、ステロイド17例、その他5例が使用されていた。これら薬剤投与例は36例で死亡率69.4% (25/36) APACHE II score 25.6 であった。これに

対して、薬剤非投与例も36例で死亡率69.4% (25/36) APACHE II score 25.6 であった。

データベースの作成により ARDS の実態を把握することが、臨床試験を進める上で必要であることを示した。